

172

昭和二年九月二十二日

彼岸会には血の垂るな親心、一人の眞実の味方、念力を注いで下さった勅命を讃仰さして戴こうと思つていたのに、一番大切な音声<sup>おんじやう</sup>が破れたので一席も満足に話し切れない。切齒<sup>せつし</sup>しているけれども、涙を呑んでいられるけれども、地団駄踏んでも仕方がない。早く治療して眞仮の水際をはつきり知らして上げねばならんと矢も楯も堪らない。

大竹破った様な信仰は最後十八願に徹底した時だが、名号を聞きながらも、他力の中の自力、方便の仮門に止まる者が十中の八九ではあるまいか。之等を誘引しなければ眞実には入られない。「無上の妙果成じきには非ず、眞実の信樂まことに獲ることし」である。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、得往生。

174

昭和二年九月二十五日

毎日毎日布教していた為一寸も声が出なくなつた。門信徒の方々が非常に心配して薬をえたり或は作つても下さつた。

その中で昨年より信仰の煩悶を續けていらるるさんが十余里の遠方の口中医者にまで手足を運び二週間分のお薬を買つて来て下さつた。お金を渡すと涙と共に押し返して、戴く程なら行きません、あなたのおの嗔れて物のわれない様にしたのは私一人の為でございませぬ。幾度聞かして戴いても、骨も砕け血もたる様な御教化も理屈だけ覚えた私の胸は承知しませ

ん。泣き泣き求めましても どうしても心が聞いてくれませんから逢わす顔がない、もう止めようと思つてもやめ切れもせず、こんな悪性があるから喉が破れたのでございます。何卒早く養生なさつて一日も早く全快して下さいと涙と共に話されたが、私の方に向かずに仏様の方に向いて下さればよいに。私はたった九十日しか講話はけはしないのに 仏様は十劫 繩手

其のじゃぞ!! と立ちづめのではないか、絶対の信仰の前には 理屈も学問も道徳も通用はしない。唯、凡夫一杯の有りの儘が仏様のお貫き通り、其のいよの通りに成ったのである。早く宿善開発すればよいになア。南無阿弥陀仏。

175

昭和二年九月二十七日

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、世の中の総てに向つて一つも不平が無い、総てが光明其の物の様に輝いている。宗教の偉大さとも言うのであるうか、心は歡喜に満ちている、総ての人は私を護り愛し敬い親しんでくれている。総ての物質は私に満足を与えてくれている。感謝の念を捧げずにはいられない。尊いではないか、嬉しいではないか、心の底よりこにこさす御親のある上は、救われた鴻恩を人様につき事がせめてもの報恩である。

愚痴暗鈍な私、人様の前に立てる様な柄でない私、姪欲財欲より他にない私、こんな悪性が生かされている事が不思議ではないか、私の親里に帰る迄、命がけで法を弘めねばならん。

歡喜の余滴

上巻 終